ぐ上つて來て、『構はない、これで行くわ』かう言つて鏡臺を出して髪を撫でつけ始めた。

富田が財布を出して中を改めてゐるのを見て、お粂は鬢を梳きながら言つた。『私、少しなら、お金、持つてますよ』

『僕もある』

『餘りお金のかゝらない處が好いわねえ。待合なんか駄目ですよ』

『でも、他に好い處があるかえ？』

『何處だッて好いぢやない？ 旅籠屋だッて何だッて？』

『でも、東京の旅籠屋は險呑だ』

『大丈夫よ』お粂はかう言つたが、『もうかうなつて了へば、何でもないわ。何うなつたつて構はないわ。仲店だの、彼方此方歩いて見ませうね。誰に見られたッて逢つたッて構ひやしない』

瀟洒した意氣な扮裝をして富田と一緒にお粂が其處を出たのは、日が暮れてから少し經つた後であつた。出かけたのをちよつと戻つて、『何とか言つて來たら、體の具合がわるいッてさつき出て行つたきりまだ歸らないッて言つて頂戴な』かう上さんに賴んで置いて、五六間先に行つて待つてゐる富田に追ひ附いた。

それでも流石に二人は土手の方へは行かなかつた。二人は裏道を選んで歩いて行つた。二人は戀人のやうにして歩いた。『何うなつたッてもう構はない』お粂はかう繰返して男の手を闇に握つた。

賑やかな明るい灯は、やがて二人の前に開けた。此頃は夜は餘程涼しくはなつたが、それでも人はまだ

陸續と涼みに出てゐた。電車の中の人影が明るく透いて見えたり、廣告燈が赤く青くぐるぐると廻轉してゐたりした。仲見世の入口の柳の葉は灯の影を微かに帶びて、その下では男が頻りに夕刊を賣つてゐた。仲見世は美しく灯にかゞやいてゐた。

觀音堂の大きな門の傍の暗い處では、お粂は富田を待たせて酸漿を買つたりした。それほどお粂の心は晴晴してゐた。二人は池の傍を廻つたり活動寫眞前の雜踏の中を押すやうにして通つたりしたが、細い通を大通の方へ出やうとするところで、向ふからやつて來たお秀にばつたり顔を合せた。

『おや、まア、富田さん』

かう言つたお秀は、お粂を捉へたまゝ容易に放さうとはしなかつた。二人は立つて話した。富田はぶらぶらと二歩三歩先に歩いて行つたが、振返つて見たときには、二人は顔を合せて何か熱心に話してゐた。お粂の顔は人の往つたり來たりする中に白く浮出すやうに見えてゐた。富田は五六間先の電信柱の處に立つて待つてゐた。

やがて別れて急いで此方に來たお粂は、

『放さなくつて困つたわ』

『何うしてゐるんだえ、此頃？』

『清どんにすつかり入揚げて了つたんですとさ。今ぢや、この土地の濱の家ッて言ふ家にゐるんだッて滴してるてよ』

『僕のことを何ッて言つてゐたえ？』
『吃驚してたわ』
『何う言つて吃驚してたえ？』
『まアさう？なんて言つてたわ。歌ちやんのことも言つてゐたわ。……でも、私、可哀相になつちやつた。清どん、ひどいんだッて。あんなやさしい蟲も殺さないやうな顔をしてゐて、あそこを出ると間もなく卷き上げて突放さうとしたんですッて。私、あの人とはそんなに懇意にしてゐなかつたけれど、話を聞いて可哀相になつちやつた。あそこで拵へた著物なんかすつかりなくして了つたんですつて！隨分ひどいのねえ』
『それで今でも矢張離れずにゐるのかえ？』
『矢張離れられないやうな樣子ね。……あそこの女中達のごた〳〵も知つてたわ。お梅さんの話もしてたわ。私も出るかもしれないッて言つたら、ぢやもう皆なゐなくなつて了ふのね。本當にあゝ喧ましくつちや、いくらお金になつたッてゐられやしないなんと言つてたわ』かう言つたが、小聲で『私も捨てられたら、仕方がないから、またさういふ處に行くのね』
お粂はこんなことを言つて笑つた。人は織るやうに通つてゐた。誰も二人の方を見るものもなかつた。人道の片側には、夜店がずらりと並んで、古道具屋の爺の顔は灯の中に明るく浮出すやうに見えてゐた。片側の氷店には、電燈が青く赤く耀いて、夜涼を趁つた客が一杯に詰つて入つてゐた。二人はある小さい西洋料理店に入つて、手輕な二三品を命じて麥酒などを飲んだ。二人の向ひ合つて腰をかけた卓の上には、小さな柘

榴の盆栽などが置いてあつた。白いエプロンをした女給仕はじろ〳〵と二人の方を見た。
其處を出て電車に乘つた二人は、何處に行くといふ當もなかつた。二人はやがて大きな停車場の前で下りて、灯の明るい町の中を歩いた。活動寫眞の大きな看板に誘はれて、ちよつと入つては見たが、面白くないので、一時間も經たない中に其處から出て來た。二人は流石に旅籠屋にも入る氣になれなかつた。
ふと氣が附くと、小さな停車場が二人の前にあつて、明るいガランとした中に乘客が二三人待つてゐた。奥には電車が一臺來てゐた。
『あそこが好いぢやないか』
『さうね、好いかもしれない。私、よく知らないけど……』
『あそこにしやう』
富田が切符を買つてゐる間、お粂は待合室の隅の方に行つて腰をかけてゐた。やがて時間は來た。
二人を乘せた電車は山の裾のやうなところを廻るやうにして早く〳〵通つて行つた。空いた車室の中には五六人しか客は乘つてゐなかつた。やがて下りた小さな停車場、その停車場から廣告燈をたよりに暗いところを登つて行くやうな路、繁つた木立の中にあるさびしい一軒の旅館、その入口からすぐ奥に傳つて行くやうな長い廊下、歩く度にぎし〳〵きしむやうな粗雜な普請、その奥のところに二人は落附く六疊の一間を發見した。

三十

女將は別に小言を言はなかつたけれど、お粂はもう其處に勤めてはゐられない身になつてゐた。お粂の秘密はもうすつかり女將や女中達に知れてゐた。さういふ二階がお粂にあつて、今度の事件の前にも男が來て泊つて行つたといふことまでも、何處からともなく知れて來てゐた。『私も變だ、變だと思つてゐたんですよ』かう歌子が女將に詳しい話をした時には、女將は深く考へるやうな顏色をして點頭いて聞いてゐた。『生若い女中は何うしても駄目だね』などと言つてゐた。

兎に角相手が長い間贔屓にして呉れた客だといふことも女將の腹にあつた。お粂がきまりわるさうに入つて行つて二日默つて留守にした詫を言ふと、『解つてゐるよ、もう解つてるよ』かう女將は手で制して、眞面目な顏をして、スッと向ふに行つて了つた。其處にゐた姪のお貞は凝とお粂の顏を見た。

お仙もお妻もわざと知らん顏をしてはゐたが、眼から來る冷笑は絶えず鋭くお粂の體に浴せかけられてゐた。誰も彼れも皆な腹の中で指して笑つてゐるやうにお粂には見えた。

ふとお定が手招をするので、其方に行くと、

『私も急に出ることになつたよ

『何うして？』

お粂は驚いて訊いた。

『少し譯があるんだよ。あれから、お前さんが出て行つてから、大騒ぎだつたよ。女將さんが怒つてね』

『私のことで？』

『いえゝ、さうぢやないんだよ。種々なことが溜つてゐたんだよ。私も散々毒づかれたよ。お前のやうなぐづは何年使つたつて役に立たないから、他所に行つて、もう少し世間を見て來いつて言はれたのよ。私だつて、お袋つていものがあるから、扶持を離れちやちよつと困るけれど、さう言はれて見れやねえ、お前さん、仕方がないから、下谷に行くつもりなんだよ』

『さう？』

かう言つて顏を曇らせて、『ぢや、皆なゐなくなつて了ふのね？』

『お仙さんも出るらしいよ』

『お仙さん？本當？それはうそぢやない？』

『本當だよ』

『さうかしら？』容易に信じられないといふ風でお粂は言つたが、『そして下谷は何處？』

『あそこにちよつと知つてる家があるんだよ。眞砂家つていふ。お前さん、また、彼方に來たらお出でよ……

……。それにしても、お前さんは何うするの？』かう言ひかけたが、ちよつと笑つて見せて、『歌ちやんが昨日

來て、長いこと何か話してたよ、女將さんと』

『さう？』

女將の後姿が見えたので、話を半に、お粂は別れて此方に來たが、種々なことが胸に迫つて來て、急に涙が出さうになつた。兎に角一年近くもゐた家をかうして離れて行くのが辛かつた。自分と同じやうに忙しい中を勤めて來た女中達がさうして皆な出て行つて了ふのも悲しかつた。

一年間のことが取集めてお粂の頭に簇つて來た。中でも、田舍の停車場で富田に逢つたことがはつきりと考へられた。あの時富田にも逢はず、逢つても一緒に川の緣の旅館に行かなかつたならば、かういふことは初めから出來て來なつたのである。お粂はその時の自分の心持を振返つて繰返して見た。

女將は『お前、また取りに來るのは大變だから、荷物をすつかりまとめて持つてお出でよ』などと言つた。お粂は今更に人の心の冷めたいのを思ひながら、二階に行つて、押入の中から自分の行李を取出して、種々なものをそれに入れた。お粂は其處に蹲踞つて一時間ほど何か頻りに整理してゐた。

お粂は新しい生活を思つてゐた。別れて行くのも辛いやうな氣がするけれど、かういふ忙しい束縛から脫れて、自由に暮して行かれるやうになるのは嬉しかつた。お粂は新しい住心地の好い二階などを想像した。

お粂は皆なに暇乞をして、やがて其處から出て來た。門には丁度自働車が一臺來てゐて、若い藝者が二人客と縺れながら此方へ入つて來やうとしてゐた。

『何うしたの？お前さん』

家では、車につけて行つた荷物を見て、上さんが吃驚したやうな顏をして訊いた。お粂は碌々その返事もせずに、二階に上つて、其處にある硯箱の蓋を取つて、長い間かゝつて、金釘のやうな拙い字で、富田に宛てた手紙を書いた。――何うか一刻も早く來て下さいまし、何うして好いかわからないで困つてをりますから――かういふ言葉の次に、――うれしい〳〵此間のことは忘れられません――などとつゞけた。

宛名を旦那さまと書いた。

下に下りて、自分でそれを出して來てから、お粂は初めて詳しい話を上さんにした。上さんは同情したやうな顏をして點頭いて聞いた。『あの方が世話して下さるなら、その方が仕合だとも、お前さん。女中なんかしてゐるより何んなに好いか知れやしないよ』

『何處か好い處はないだらうかね？お上さん』

『矢張、此の近所でかえ？』

『この近所の方が好いつて言ふのよ』

『いくらもあるだらうよ』

『心がけて置いてお呉んなさいな』

かう賴んで置いてからお粂は女將のことや女中達のことなどを話した。歌子と富田との關係から、自分と富田との關係の出來て行つた話などをも細々としてきかせた。『わからないものねえ。こんなにならうとは、私、その時分は少しも思はなかつたんですものね。緣ね、矢張……』などと言つた。

三十一

路は土手からだら〳〵と下りて、工場に勤める人達の長屋の傍を通つて、眞菰や芦などの茂つたところから段々川の方へと向つて行つてゐた。そこに靜かな二階屋が一軒あつた。ある晴れた日の午後に、少しばかりの荷物を載せた一臺の車は、徐かに其處を通つてその前に行つて留つた。お粂と富田とがあとから續いた。

矢張工場に勤めてゐる夫婦者が住んでゐるのではあるが、室が綺麗なのと、川に近いのと、前の處よりはいくらか世離れがしてゐるのとで、二人は取敢へず其處を借りることにきめた。二人は二三日前に一緒に來てそこを見て行つた。

庭といふほどの庭もないが、兎に角樹木の多いのが富田の氣に入つた。殘暑の赤い夕日の下には蟬などが靜かに鳴いてゐた。下階に住んでゐる夫婦者は、工場の方に行つてゐることが多いので、つひ此間までそこの二階を借りてゐた若夫婦は、下婢を一人使つて自分で總べての炊事をしてゐた。『私もさうするわ』などとお粂は言つてゐた。

荷物を運んで行つた時には、昨夜夜業で遲かつたと言つて、上さんは晝寢をしてゐた。樹の間を透した日影は薄く二階の緣側にさして、涼しい風は川の方から來た。お粂は汗ばんだ顏を手巾で拭いて、『涼しいのね』

などと言つて、狹い裏の欄干の處に立つてゐた。下には鳳仙花などが赤く白く咲いてゐた。

暫くしてから、前で荷車の留る音がした。と思ふと、新しい箪笥の隅がちらりと見えた。『來たわ、早いのねえ』かう言つてお粂は嬉れしさうにして下りて行つたが、小僧を手傳つて、やがて富田はそれを二階に運び上げた。茶箪笥の方には、小さい硝子戸がはまつてゐた。

室の隅に、壁に寄せて置いて、お粂はすぐ自分の行李から著物を出してそれに入れた。『でも、あそこにゐたんで、著物だけは出來たのよ。このお召は好い柄でせう』などと言つて入れかけたのを出して富田に見せたりした。『これでも總桐ね……。いくらしたの？十五圓。これで結構ですとも。十分だわ』ちよつと笑つて見せて、『貴方のも二三枚その中に拵へて入れませうね』

長火鉢を古道具屋から届けてよこした。お粂は自分で出かけて行つて、近所の芋屋からそこに入れる灰などを買つて來た。早くきちんと家らしくして見なければ氣がすまないといふ風であつた。今度の移轉について、富田の出した金はまだ多く殘つてゐた。鐵瓶や湯わかしなどをもお粂は買つた。床間のがらんとしてゐるのを氣にしては、『貴方、今度來る時には、何か懸物を持つて來て頂戴ね。わるいんで好いから……。何かあるでせう』などと言つた。二人はつゞいて蒲團を拵へる話などをした。お粂の持つて來た夜著の襟は汚れてゐた。

その他買つて來たものに、餉臺だの手桶だの茶碗だのがあつた。水差しは大きな土瓶で間に合はせた。團扇や七厘や德利などは、下から上さんが貸して呉れた。

やがて鐵瓶の沸く音が靜かに聞え出して來た。お粂はいかにも嬉しさうにして、長火鉢の前に横に坐つて、蓋などを明けて見て『鐵氣は出ないでせうか』などゝ言つてゐた。派手な中形がよく似合つて見えた。

茶を淹れて二人は樂しさうにして話した。夕日の深くさし込んで來るのを見ては、『簾を一つ買つて來なくつてはいかんね』などと富田は言つた。お粂はお粂で、『此次ぎ入らつしやる時までには、綺麗にして置きますよ。花か何か買つて來て其處に置くと好いわね。……本當に綺麗にして置くわ、見違へるやうにね』

移轉蕎麥を下へ持つて來る時分には、硝子瓶の德利の二本目がもう鐵瓶の中に浸つてゐた。

『今日は馬鹿に醉が早い。もう赤くなつたらう？』

『さうね、かなり赤いわ。……私は？』

『お前もちつとは赤くなつた』

『さう赤くなつて？』顏を撫でて見て、『本當に嬉しわ。だけど、歌ちやんつて言ふ人があるんだから心細い』

『まぢあんなことを言つてゐ』

『だつてさうですもの』

『まだ、わからないんだな。そんなわからないものかね、男の心は——』

こんな話を二人は笑ひながらした。二人は好い加減にして酒をきり上げて蕎麥を食つた。丁度その頃田圃を越した向ふの長屋では、混雜した中で、女の行水を使つてゐるのが見えた。襁褓や洗濯物などに當つた夕日はもう薄れて行つてゐた。

夜になつてから二人は散歩にと外へ出かけた。二人は川の方へと先づ向つて行つた。其處には新しく出來た橋錢を取る橋などがあつた。大きな工場の窓の灯の中では、夜業のエンジンの音が高くあたりにきこえてゐた。

汽船のとまる小な埠頭から渡場の方へ出て、垣に添つた細い道を通つて、二人は土手の方へと出て來た。川は溶々として流れてゐた。對岸の灯が二筋三筋、水に落ちて靜かに搖いてゐた。

櫻の葉のチラ〳〵散る中を樂しい氣分で二人は歩いた。土手下には、灯の明るい酒屋や。野菜を並べた八百屋や、軒燈のおぼろげについた蕎麥屋などが並んでゐた。若い上さんの氷を削つてゐる店などもあつた。土手の奥のお宮のあるあたりまで行つて、二人は引返して來た。二人はやがて別な路を通つて家の方へと歸つて來たが、出る時つけて行つた二階の電燈は、遠くから明るくそれと指さゝれた。

三十二

俄かに暇になつたお粂は、講談や小説本などを近所の貸本屋から借りて讀んだり、前にゐた家の上さんをさそひ出して、活動寫眞を見に行つたりして日を暮した。下女の好いのがないのと、一つには下の上さんが飯位は炊いて呉れるので、強ひてそれを探さうともしなかつた。夜は遲く、朝は十時すぎまでも寢てゐた。貸本屋の亭主といふのは、髪を綺麗にわけた色の生白い男で、ぢき近くの役場に勤めてゐたが、お粂は今年五つになる女の兒を持つたその細君とやがて懇意になつて、半日其處に行つてお饒舌を續けたりした。可愛い女の兒はぢきお粂に昵んだ。

『私、清元を少し復習つて見やうかしら』ある日かうお粂は富田に言つたが、その翌日から、お粂の姿は貸本屋の二三軒先にある格子戸のはまつた女の師匠の許に見えてゐた。師匠は二三年前まで—土地に出稽古に行つたものだが、年を取つて大儀なので、此頃では家に來るものばかりを教へてゐるといふやうな品の好い婆さんであつた。お粂は午前の一時間、時には午後の一時間を其處で過して、歸りにはきまつて貸本屋の店に寄つて面白さうな本を借りて來た。細君と話してゐる間、傍に寄つて來る女の兒の頭を撫でて、『子供つて本當に可愛い。私も欲しいけれどもねえ』などゝ言つた。男といふものを話の種にする時には、二人は聲を

擧げて笑つたりした。『家のは、弱くつて仕方がないんですよ』後には細君はこんなことを言ふやうになつた。

お粂は此頃よく化粧をした。高い香水や白粉下などをも買つて來た。夕方になると、きまつて縁側の處に鏡臺を持出して、長い間かゝつて髪を梳いた。肥つた髪結が一日おきには屹度やつて來た。

富田は一週間に一度位はきまつて訪ねて來たが、待つてゐて來ない時には、溜息がひとり手に出た。さういふ時には、貸本屋の店に睦しさうに坐つてゐる夫婦が羨ましかつた。好い男を亭主にしてゐる細君が殊に羨ましかつた。亭主は莞爾して棚から本を出してお粂に渡した。手首の際立つて白いのがいつもお粂の眼に附いた。

『旦那がやさしくつて貴方は仕合せよ』

こんなことを言ふかと思ふと、時には富田の來て泊つて行つた晩の惚けなどを細君に話した。『昨夜は喧嘩をしちやつたのよ。だつて、遲く來て置いて、今夜は泊つて行けないなんて言ふんだもの。男ツて本當に勝手なものね。餘りだから怒つてやつたわ』

體の爲めになるといふ食物の話、何うしてか此頃心から男が戀しくなつたといふ話、一夜でも獨りではさびしくつて仕方がないといふ話、さういふ話を二人は寄ると觸るとした。棚の奥にかくして藏つてある本を借りて來た時にほ、『大丈夫よ、體に毒になつたつて構はないわよ』こんなことをお粂は笑ひながら言つた。

お粂はその女の兒を度々二階に伴れて來た。眼のくるりとした、西洋人形のやうな顔をした兒で、『小母ちやん、小母ちやん』と言つてはよく跡を趁つて來た。近所の人達は、無邪氣なことを話しながら土手下の路

を歩いて來る二人の姿をいつも見かけた。

本を讀んだり三味線を彈いたりするお粂の傍で、おとなしく遊んでゐる中に、不意に眠氣がさして、小さな手を疊の上に投げ出して、すや〳〵眠つて了ふことなどもあつた。お粂にはそれが堪まらなく可愛かつた。お粂は小さな手だの足だのに觸つて見た。お粂は心から子供が欲しいと思つた。

『此處は小母ちやんの家よ』寐ぼけて、戸惑ひしたやうなキヨロリとした顏をして立つてゐるのを、傍に寄つて、しつかり抱きしめて、此方に伴れて來たりなどした。富田に向つては、『可愛い子でせう？この位の中が一番可愛い盛りね。こんな子が一人あつたら、何んなに好いだらうと思ふわねえ。お仙さんが子供に夢中で、男のことなんか何とも思つてゐないのを不思議に思つてゐたが、かういふ可愛い子があれば、さうかも知れないと思ふわ』

始めは富田の鬚の多い顏や、ビカ〳〵光る眼鏡などを怖いものゝやうに思つてゐたが、後には段々と馴れて、手を出すと、その傍に行つて抱かれた。後には富田も玩具などを買つて來た。

ある日、お粂は富田に言つた。『此間、歌ちやんに逢つちやつた』

それは貸本屋の細君と女の兒と三人で活動寫眞に行つた歸途であつた。お粂は此處に來てからは、成たけ女中達や知つてゐる人達に逢ふのを避けて、いつも川の方から汽船に乘つて出かけて行くのを例としてゐたが、その日は土手に上らうとするところで、向ふから來る歌子の車にばつたり出逢つた。歌子は奥の料理屋に行く途中らしく、綺麗にお化粧をして、ヱールなどをしてゐた。それでもちよつと頭を下げて挨拶して行

つた。『私の此處にゐるのを皆な知つてるかしら』かうお粂は考へるやうにして言つたが、『貴方、逢つてるんでせう此頃？』

『逢つてやしないよ』

『逢つてるのよ』

『そんなら、さうして置くさ』

そんな話は時々出たが、富田はいつもそれを否定した。『だつて、きまりがわるくつて、あそこにはもう行けやしないぢやないか。勘定がまだ少し殘つてるんだけど、それさへやらずにあるんだよ』

『だつて、他にいくらもお茶屋があるもの』

此頃では、二階の一間は前とは見違へるやうに綺麗になつてゐた。床の懸物も出來れば、夕日を遮る簾も出來た。壁には鬱金の袋に入つた三味線がかゝつた。裏の欄干のところには、秋草の小さい盆栽などが置かれた。お粂は朝に夕にそれに水を灌いだ。

三十三

朝早く富田の姿が渡場のところに見えてゐるとなどもあつた。秋になつてから、川の水は著しく澄んで、向ふの岸の新しい二階や、樹木や、石を積上げた塀や、小さな雁木などが朝潮の滿ちた上にはつきり映つて搖いてゐた。汽船のまだ來ない小さな埠頭の傍には、荷を一杯に積んだ船が靜かに往つたり來たりした。あらゆるものが總て皆な生々として爽かな色を着けてゐた。上流の大きなガス溜の周圍には、煤煙が勢よく渦を卷いて漲り渡つて見えてゐた。

垣に添つた道には赤い白い木槿などが咲いてゐた。蓮の葉はやゝやつれて土手の櫻はバラ〳〵と散つた。富田は工場の方へ出かけて行く勞働者の群に其處此處で逢つた。工場の汽笛の音は彼方此方から聞えて來た。

一日毎に寢しい秋はやつて來た。蟲の音は枕に近く、月が晝のやうに裏からさし込んで來る夜もあつた。蚊はもう餘程少くなつてゐた。秋雨が幾日か續いて降つたあとに、日がくわつと照つて、田圃の上には赤蜻蛉などが飛んだ。お粂は富田の來るのを毎晩のやうに待ちながら、新しく出來たふつくりした蒲團の上にひとりで寢た。

『一晩貸して頂戴』

時にはお粂は女の兒を無理につれて來て一夜抱き緊めて寢ることなどもあつた。お粂は端唄などをひとりで彈いた。

ある夜下の上さんの持つて來て呉れた郵便には、附箋が澤山についてゐた。手に取つて一目見たお粂には、その差出人の誰であるかゞすぐわかつた。それは兵營に行つてゐた人からであつた。お粂は封を切つて長い長い手紙を讀んだ。男は病氣で、兵營から歸つて、今では國でぶら〳〵してゐた。肺病らしい容體であつた。

手紙には種々なことが書いてあつた。熱いさびしい男の心が其處にも此處にも見えた。お粂は別るゝともなくいつとなく別れて行つた徑路を頭に描いた。互に逢ふことの出來ないやうな境遇から段々覺めて行つたやうな戀であつた。それに、男は弱い性質で、氣象もはき〳〵してはゐなかつた。お粂は手紙を膝の上に置いてその時分のことを思ひ耽つた。

續いてこの春二階で逢つた男のことも思ひ出されて來た。『何うしてゐるだらう』などゝも思つた。浮草のやうに、かうして段々移り變つて行く自分の身も飜へつて考へられた。お粂はもう二十三になつてゐた。

貸本屋の睦ましい夫婦の仲に自分の身を引較べて、最初に持つた亭主を思ひ浮べて見た時には、厭な〳〵氣がした。その爲にかうなつて行つた自分の生涯のやうにも思はれた。お粂は手紙を丸めて、立つて裏の欄干の方へ行つた。秋雨がさびしく音を立てゝ降つて來てゐた。

三十四

夜遅く來た時には、富田はひどく醉つてゐた。二階にあがるとすぐ著物も脱がずに蚊帳の中に入つた。お粂は金盥に水を入れてそれを枕元に持つて來て置いた。

『何うして、そんなに醉つたの？』

かう訊いても、

『うん……醉つちやつた』とばかりで、さも苦しさうにすぐ彼方に向いて了つた。手足をだらしなく疊の上に投げ出した。

『まァ、著物だけお脱ぎなさいよ』お粂は強ひて寢衣に著改させて、蚊帳の外でそれを疊みながら、袂の隅隅を隈なく探した。酒の香の沁みた手巾と丸めた紙とが出て來た。

女の移香もした。

お粂は默つて蚊帳の中に入つて、長い間其處に坐つてゐた。室の隅の方に引張つて行つてある袋をかけた五燭の電燈は、微かに寢衣すがたのお粂を照した。お粂はじつとして身動もせずにやゝ暫く坐つてゐたが、やがて微な溜息をついて、男に背を向けたまゝ小さく横になつた。男の苦しさうに寢返りを打つ氣勢がした。

しかし一時間後には、二人はいつか顏を合せて話しをしてゐた。

『もうさめて？』

『大分醒めた——』

『何處でそんなに醉つたの？』

『友達と川の向ふに行つてね——えらく醉つちやつて、此處に來るのもやつとだつたよ。よく路を忘れなかつたらう！』

『川の向ふ？　さう川の向ふ？』

お粂はわざと笑つて見せた。

『何故？』

『だツて、私だツて、その位のことはわかるわ。歌ちやん、何ツて言つてゐて？私のわる口を言つてゐたでせう』考へるやうにして、『男ツて當にならないものね。貴方も矢張信用の出來ない人ね』

『何故だえ？　また、疑つてゐるのかえ？』

『好いのよ』

お粂は男の方に背中を向けて了つた。

『本當だツて言ふのに……』

『厭……。今日行つたところをすつから話して聞かせなければ厭……』

『ぢや話すよ。歌公がよろしくッて言つてゐたよ』
『知らない』
お粂は肱で男を強く衝いた。富田は、『でも、この通りへゞれけに醉つて歸つて來たんでも無事だッたのがわかるぢやないか。うんと惚氣をきかせてやつたよ。散々人を酷めた罰だ』
『ぢや、貴方、私のことをすつかり話しちやつたの？』お粂は俄に起き返つた。
『何ァに、詳しく……話しやしないよ』富田は慌てゝ言つて、『好いぢやないか、話したッて構ひやしないよ』
『知らない、知らない』お粂は身を悶えて見せた。
暫く默つてから、
『そして、何處なの？一體、春月？花の家？』
『まァそんな處だよ。好いぢやないか、何處でも』
『春月よ、屹度』
かう言つたが、『あそこで始終逢つてゐるんでせう？それに違ひないわ。此間早く歸つた時にもあそこに行つたんだよ』
『そんなことはないよ。あれから今日初めて逢つたんだから』
『うそばつかり』ちよつと間を置……て、『そして、何て言つてゝ？』
『お上のことを言つてたつけ』

『何ッて？』
『あれでは女中が可哀相だなんて』
『貴方、そんなことを聽いて來たの？』かう言つたが、急に眞面目な聲になつて、『私、お世話になつて居てもお氣の毒だから、何處かに行くわ。元を言へば、私がわるいんだもの……貴方はほんの出來心でやつたとなんだから、お世話になつてゐる方が間違つてゐるんですよ。私が馬鹿なんですから』
『何故だえ？何故そんなことを言ふんだえ？』
『だッて、さうですもの。私が馬鹿で、勝手でかういふことになつたんですもの。私がわるいんですもの……。誰を恨むせきはありませんわ。貴方だッて、よくして下さるんですもの。今度だッて、大變お世話になつたんです』いやに聲を細くしたと思ふと、お粂の眼からは涙がいつかこぼれかけてゐた。
富田は慌てゝ、『そんな風に思つて呉れちや困るよ。行つて逢つたのがわるければ、あやまるよ。そんな氣で行つたんぢやないんだから、本當にさうなんだから』お粂の方に體を寄せて、『おい、本當に、勘忍して呉れ』
『いゝえ、それ處ぢやないわ。こんなにお世話をして下すつて難有いと思つてゐるんですもの……。けども……けども……』言ひかけてお粂は蒲團の上に突伏して了つた。涙が止度なく出て來た。歔欷げる度に、銀杏返の髷の搖くのが微に電燈の薄暗い光線の中に見えてゐた。
『本當に勘忍して呉れ。僕がわるいんだから。え、え、勘忍して呉れる？』かう言つて顏を寄せて、女の體を抱へるやうにして、『本當に、そんな風には思つてゐはしないんだから……』

男の腕に抱へ上げられたお粂の白い頰は、名殘なく涙に濡れてゐた。自分ながら不思議に思はれるほど、あとからあとへと涙が出て來た。お粂は長い間顏に手巾を當てゝゐた。

富田は種々になだめすかした。『本當にそんな風に思つてゐやしないんだから』かう繰返して言ひつゝ富田は、わざと女の顏を覗き込んだりした。富田の醉はすつかり覺めてゐた。やがて涙の過ぎて行つたあとには今度は甘い悲しいしんみりした情が二人の胸を占領して來た。二人は我に心と心の融合ふのを感じた。

三十五

心の蟠りの解けて流れて行つたあとには、やさしい情味が溢れて漲つて來た。それは眞面目な情緒を持つた喜悅で、お粂の心は前よりも一層深く男の方に向つて開けて行くと共に、男もこのやさしい女心を離し難いやうな氣がして互に堅く手を握り合つた。他に女があらうがあるまいが、この男の情は忘れられないといふ風にお粂は思つた。

『あれのことなんか、本當に思はないたッて好いんだよ。あいつ等は商賣品だよ。僕だつて、君のことを思つてゐなけりや、かういふ風に世話をする譯はないんだからね。そこを考へて見れば、すぐ解るぢやないか』

『それは解つてるわ。だけど、私のことだッて考へて見て下さいよ。私、一人でかうして二階にゐるんですもの、時には淋しくつて仕方がないこともありますよ。毎晩、待つてゐるんですもの、貴方の來るのを……』かう言つて笑つて見せて、『今度はもつと近く來て下さい。この間來てから十日目になるのよ、今度は。三日目位に來て下さると好いんだけど……』

『さうは行かないけど……』

『お家の都合もあるんでせうけどもね。私一人でさびしくなつて了ふ……。今度のやうに來て下さらないと、何うかしたんぢやないかとすぐ思ふのよ。矢張始終一緒にゐて下さらなけりや物足りないわねえ』お粂は何か思ひ出すやうにしてほろりとした。

『成たけちよいちよい來るやうにするよ』

『醉つてなんか來ちや厭ですよ』

富田は默つて笑つてゐた。

お粂が此間來た男の手紙を富田に見せる時分には、富田も歌子の話をちよいちよいお粂に聞かせた。歌子の話だと言つて、富田はその大きなお茶屋の話などをした。『へえ、さう、お仙さんが采配を振るやうになつたんですか。さうだらうと思つた。あの人も出るなんて言つてゐたけれども。何うしてあの人が出るもんですか。お定さんを出すやうに出すやうにとばかり仕かけてゐたんですもの。それをお定さんは知らずに、お上さんがわからないつてばかり言つてゐるんだもの。お定姐さんは、ごくずるい人が好いんですからね』かう言つたお粂はお茶屋にゐた時分のことなどを繰返して考へてゐた。

電燈の微暗い中で、二人は種々のことを話した。下に寢てゐる上さんは、富田が醉つて入つて來た時から眼が覺めて、それからすつかり眠られなくなつて了つたが、二階の話聲は、始めは强く、中頃は靜かに、ちよつと途切れたかと思ふと、今度はまた靜かな私語が長く〳〵續いた。女のひそやかに笑ふ聲などもした。

『いやですよ、貴方は。あの人のことばかり考へてゐるんですもの』かういふお粂の聲がやがて際立つてはつきり聞えた。あとはしんとした。

お粂は男の話の中から絶えず歌子の面影をさがした。歌子は例の美しい表情と巧な腕とで男の心を自由にあやなしてゐるらしかつた。春月で逢つてゐるばかりでなく、もとのやうにそのお茶屋にも出かけて行くらしかつた。女將や女中のことを富田はよく知つてゐた。

お粂をかうして圍つて置くといふことも富田はよく歌子に話して聞かせる樣子であつた。そんなことはないやうに常に辯解はしてゐるけれど、話をしてゐる口裏からすぐそれがわかつて行つた。さうした社會のことに詳しいお粂には、何も彼もはつきりと判斷された。女に逢つて來た時と逢はずにやつて來た時との區別は、一目見てすぐ飲み込めた。

怜悧な歌子は、お粂のわる口などは少しも富田に言はないらしいが、それに引かへて、富田は歌子のわる口をよくお粂に言つた。後にはお粂は『實はさうぢやないんでせう。憎いんぢやなくつて可愛いんでせう。わる口もお惚けの部でせう』などと言つて笑つた。

心と體とを合はせて、お互に泣いたり詫つたりして見たところで、それはその時ばかりで、何うにもならないものだつた。自分に對してもかなりの愛情を持てゐながら、一方では歌子の體から離れるとの出來ない男の心といふやうなものも、矢張何うにもしやうのないものだといふことが段々お粂にもわかつて來てゐた。

初めはお粂は富田とわかれる時のことを常に想像した。戀しいのが昂じて、後には辛く悲しく、かういふ思ひをする位なら、いつそ別れた方がなどと思ふこともあるが、それは自分で自分の疑惑の影を大きくして行つ

た時で、別れてからの後のことを考へると、さびしくつてとてもそれは堪へられないやうな氣がした。富田の體は離れられずにしつかりお粂に絡みついてゐた。お粂は其處に行くと、いつも突當つて了つた。後には、自分で世話になつてゐるから、自分の思ひが心から男に通じない。いつそ自分で苦勞して男に入揚げて眞を見せたらなどとも想像した。『今に、私の心を見せて上げますから』お粂はかう富田に言つた。

……妙見さんへ願かけて、
かへる路にもその人に、
逢ひたや見たやこひしやと、
こつちばかりで、先やしらぬ、
しん氣らしいぢやないかいな、

かういふ唄を師匠のもとで教はつた時には、『好いわねえ』と言つて、すつかり覺え込むまで、お粂は何遍となく彈いて見た。男戀しい女心は昔の唄の文句の中にも闇夜の星か何ぞのやうに澤山にかゞやいて殘つてゐた。お粂は家に歸つて來てからも、三味線を下して、裏の窓の處に坐つて、靜かな調子で猶ほ二度も三度もそれを彈いた。お粂の頰にはいつか涙が流れて來た。

三十六

ある日、師匠は何處から聞いて來たか、踊の上手なので名高い桃子といふ藝者が、ある男に夢中になつてゐる話をお粂にしてきかせた。『桃ちやん？　まア、あの桃ちやんが？』

お粂は眼を丸くした。

容色こそそんなに好い方ではなかつたけれど、檢番のお照をばさんの養女で、小さい時分から藝事を仕込んで、土地でも五本の指に數へられる妓であつた。つひ昨年あたり好い旦那が出來て、新しく家を持つに就いても、その旦那のつぎ込んだ金は、ちつとやそつとのことではないといふ噂であつた。おとなしくつて堅くつてそれでゐて何處かしつかりしてゐた。富田も最屐にして、いつもよく聘んでは『春雨』などをどらせた。

『お前さんも知つてゐけど、あのおとなしい妓でせう。そんなことがてきぱき出來やうとは何したつて思はれやしないよ。それが、お前さん、自分でちやんと旦那に斷づたんだつて言からね。お暇を頂きたいつてちやんと自分で言つたんたとさ。尤も、その前にも旦那が不思議にしたことがあるんだつて。ある日、行つて見ると、前の格子に鍵がかゝつてゐる。おいおいつて呼ぶと、桃ちやん、障子をあけて顏を出したつけが、あ

の、今日はお人ですから、すぐ參りますからお茶屋の方へ行つてゐて下さいつて言ふんですつて。不思議だと思つたんですつて？　でも、ねえ、あのおとなしい妓だから。そんなことはないと誰も思ふし、姐さん方だつて、あの妓に限つて、そんなことはないつて言てゐたんだつて。それがお前さん、てきぱき旦那には自分から斷る。檢番のお照さんには、これまでの御恩は忘れないけども、清算をして關係を斷ちたいつて申込んで行つたんですとさ』

『男つて何ういふ人？』

『その人だか何だかわからないけれど、何でも、賭博打の岩何とかいふ親分の息子か何かで、名代の女たらしだとさ。その人なら、よし町あたりぢや聞えたもんだつて。その男が通ると、彼方でも此方でも女の子が鼠鳴きをするやうな男なんだつて。何でも五人や六人は眞裸にされて放り出された藝妓もあるんだつていふことだよ。上さんも子供もあるんだつて言ふけれどね』

『まあねえ……』

『多分、その男だつて言ふ話だよ。惡いものに引かゝつたものだつて、昨日妹の處に行つたら話してゐましたよ。妹はよし町にゐたことがあるから、よくその男のことを知つてゐるんですよ。その男に上さんが出來ない前は大したもんだつて？、意氣な扮裝をして、十五兩もする下駄などを穿いて、鶯の籠でも持つてすらり〳〵歩くといふ風なんだつて。そしてその男が通ると、お酌さん達が、アとかトとか言つて手眞似をするやうな人だつたつて？　今度も女房を出して、お前をあとに入れるつて桃ちやんに言つてゐるんださうだけども、それが手なんだとさ。今に、すつかり剝れて、放り出されて了ふんだらうつて、それは評判だよ』

『まあ、さうですかね。あの桃ちやんが。あのおとなしい人がね』お粂は溜息をついて深く考へるやうな顔色をした。

師匠は話をつゞけた。

『それに、さういふ男だから、子分が澤山にゐるから、かなわないよ。イザとなると、當人は知らん顔をしてゐて、子分が何うかして了ひますからね。さういふ人にかゝつては大變だよ、お前さん』

『さうね……そして、それはいつから始まつた話なんでせう』

『何んでもこの四月頃からだつて！』

『四月？　よくわからないでゐましたねえ。よくあのお照をばさんが知らずにゐましたねえ』

『それといふのもお前さん、あの妓がおとなしいもの、誰もそんなことをしやうとは思はなかつたんだもの』

『さうねえ』と言つて、お粂は考へて、『それまで誰も知らずにゐたんでせうか？』

『先月あたりから、すこし變だとは勘付かれてゐたんですと。何時行つて見てもあそこの家の格子の鍵がかゝつてゐるんですつて。妹の家にゐる抱妓があの人と懇意で、ある日一緒に芝居に伴れて行つてやるつて言ふんですつて！　そして仕度が出來たら待つてゐて下さい、私の方から行くからつてかう言ふんですつて。いゝえ飛んでもない、こちらが上りますつてね、何しろ先は一流の姐さんだから、早目に仕度をして

行つて見ると、矢張鍵がかゝつてゐるんですとさ。そして何故私の方から行くつて言つたのに、來たつて言つて何うしても中に入れないんですつて。何でもその時にも男の影が奥に見えてゐたッて。旦那ぢやなかつたつて！』

『それぢや、始終家で逢つてたのね』

『だから今日までわからないでゐたんだよ。お茶屋さんならすぐわかるんだけど。お茶屋では、春月に一度とか二度とか行つたことがあるさうだけれど、その時も男は早く歸つたんだつて……。あのお照さんのことだから、かね〳〵さういふことにも氣を配つて、家を持つ時にも堅い婆あさんをつけてやつて置いたんだけども、その婆あさんもすつかり向ふに虜になつて了つたんだね。お照さんが聞いても、いゝえそんなことはありませんつて言ふもんだから安心してゐたんですとさ。それが、わかる時には小さなことからわかつて行くもんだね。そら、子分が大勢來て飲んだり食つたりして行くでせう。何うも米が入りすぎる、香の物が入りすぎるつていふ處から段々知れて行つたんだと……』

『餘程深く打込んだのね』かう言つたお粂は、桃子の姿を頭に浮べて見た。容色がないから、堅くしてもゐられるといふ妓であつたことをお粂は思ひ出した。涙脆いやうな質で、女將に叱られて年に似合はずお座敷で眼を赤くしてゐることなどもあつた。お照をばさんの難しいことなどもよく滴してゐた。二十三にもなつて、まだ心から男の情を知らないといふ風な妓であつた。『騙されてゐると思へば、可哀相だけども、それまでに思込んで男に惚れゝば本望には本望ね』かう言つたお粂の胸には、しんみりした同情が湧くやうに上つ

て來てゐた。土手を家の方に歸りながら、お粂は種々とそのことを思つた。さういふ脆い女心を玩弄にする男心が憎いといふよりも、さうまで惚れて行つた女心が羨ましかつた。その日一日桃子の姿はお粂の頭を離れなかつた。

その話を富田はもつと詳しく知つてゐた。つきものがわるいので、檢番のお照をばさんもあきらめて、桃子が申込を承諾したが、清算の結果、桃子が少からぬ金を出さなければならぬことになつて、旦那に拵へて貰つた衣裳やら帶やら時計やらを大抵質に置いたり賣つたりしたといふことであつた。『もう、あのダイヤなどもありやしないとさ』

『さう、あのダイアも……』

お粂は驚いたやうな顔色をした。

それはさういふ仲間にも評判になるほどの大きなダイアで、誰も彼も皆な羨望の眼を睜つたものであつた。お粂もよく知つてゐた。歌子もちよつとお座敷で借りて自分の指にはめて見て、『好いわねえ、私も一つ欲しい、貴方買つて頂戴よ。その位の心意氣を見せるものよ』などと言つたことがあつた。

『可哀相ね』

『さうさ、可哀相だと言へば可哀相だが、しかし自分の心からさうしたんだから、悔むところはないさ。あの社會にも、さういふ事件が時々あるから面白いんだ。矢張、人間だからな。いくら稼業にしてゐても、金ばかりぢや駄目だからな……。それは金ばかりのやつもあるさ。金さへ取りや好いつていふ奴が當世さ。し

かし、さうしてゐられないところが面白いぢやないか。生物だからな』富田はこんなことを言つて笑つて、『しかし、今度のことはあの女などにはありさうなことだよ。中年から藝者になつたんなら、もつとわるく賢くなつてゐるんだけれど、藝こそあれ、あゝいふ容色で、あゝいふむつかしい養母を持つて、自分の本當の願はこれまですこしも滿足させられたことがないんだからな。目が覺めたんだよ、覺醒したんだよ。散々剝かれて女郎にでも賣られるか。それともまたさういふ色師を自分のものにすることが出來るか。そこが面白いぢやないか。當人のためには少くとも眞劍のことだからね。本當の意味から言ふと、却つて幸福だよ』

『でも、夢中で、先が見えないんでせうからね』

『夢中になつたのが面白いぢやないか。意味があるぢやないか。盲目にならずに、勘定ばかりして、燃えもせずに、ぷす〳〵くすぶつて一生を終つて了ふやつが澤山にある世の中だ。それを、兎に角、燃えたのは面白い。その爲めに始めてあの女の價値が出て來たといふやうなものだ。僕はそこを贊成だ』

『それはさうですけども、見す〳〵だまかされてゐるのがわかつてゐては可哀相ね。あの人はやさしいんですもの。今の秀妓さんの旦那だつて、もとは桃ちやんの旦那だつたんですものね……。あの時だつて可哀相だつた。』何ともないわ』などゝ平氣で言つてはゐたけどもね』

『矢張何處か面白い處のある女なんだよ』

『ぢや、私もさうしようかしら』笑びながら戯談のやうに言つたお粂は『でも、私のやうなものは駄目ね。……相手がないもの』

『相手があるなしぢやないよ。惚れるつていふことは、惚れられるから惚れるつて言ふものぢやないからね』

『それはさうね。現に、私なんぞそれよ』

『何うだか』

富田は笑つてゐた。

『さうよ、本當に……』かう言つたお粂はすぐ話頭をかへて、『さうして、何うしてるの？　一緒にゐるの？』

『丸髷なんかに結つてゐるさうだ』

『男も來てるのかしら』

『さうらしいよ。兎に角評判だね。何處でもその話ばかりだよ。あの女がさういふことをしたといふことが非常にめづらしいと見えるね。それから、あのお照をばさんの監督の下で、さういふことが出來たといふことも並でないといふ風に思はれてゐるんだね』

『それはさうでせうね……。それにしても、一體初めは何うして出來たんでせう？』

『何でも稽古の途中か何かで出來たらしいよ。だから、今まで知れないでゐたんだよ。稽古に行くんだつて言つちや、朝の八時頃から三四時位まで始終内を明けてゐたつて言ふからね。その位時間があれば、どんなことでも出來るからね』急にふと思ひ出したらしく、『さう言へば、常子が置手紙をして、家出をしたさうだよ』

『常ちんが？』

『僕も吃驚したよ。本當にこの頃はいろんなことがある。此間、友達を呼んで會をした時ね。あの時、常子も桃子も皆な來てゐたんだからね。まだいくらも經ちやしない。二月位にしかなりやしないよ』

『さうね』考へるやうにして、『矢張、あの兄さんかしら』

『さうらしいよ』

『あの人は點つてゐる質だけども、何處かしつかりしたところがあるから、さういふことが出來るんですよ。でも、本當にあの兄さんかしら？』かう言つて間を置いて、『本當にいろんなことがあるわね。一月と言はれないわね』

お粂の眼の前には、種々な人が映つたり消えたりした。移り變りの烈しいのが令更のやうにお粂には思ひ廻された。かうして話してゐる富田とも、いつ別れて行つて了ふかわからなかつた。泣いたり笑つたりして過ぎて來た自分の姿が其處にも此處にも見えた。さういふ人達に比べて何うなつて行く自分だらう。お粂は默つて富田の盃に酌をした。

お粂は不意に富田に言つた。『そして、貴方は本當にこれまでに眞劍に女に惚れたことはあつて？』

『それはあるとも……。眞劍に惚れて、煮湯を飲ませられるやうな思ひをしたのも二度や三度ぢやないよ。だからこんなになつちやんたんだ』

『何んな事があつたの？』

『それは澤山あるよ。數へ切れないほどあるよ。僕も何方かと言へば、すぐ眞劍になつて了ふ方だからね。

十六七時分からもう眞劍の戀をしてたんだよ』

『だつて、その時分は唯、綺麗に思つてゐたばかりでせう』

十六七時分には、まださうだがね。三度目位にラブした女には、もう思つてゐるばかりでは滿足が出來なくなつてゐたよ。これでね、僕がもう少し好い男か何かで、女が向ふから寄つて來るやうだと、とても身は持てなかつたんだけれどね』

『一番惚れた女は？』

『それは二十五六の時だがね。その時は死んで了はうかと思つた位だよ。ラブした女は皆な中年の男に取られて了ふんだからね。僕のやうな貧乏書生などは相手にして呉れやしないからね。……始終、青い顔をしてふさぎ込んでばかりゐたんだよ。話せば、面白いことがあるけど、面倒臭い』

『少し話して聞かせて下さいよ』

『一番ひどい眼に逢つたのは、友達に取られて了つた時だつたよ。わかつたやうな顔をしてゐても、まだその頃は、存外色戀なんて本當にわかつてゐやしないんだからね。三人一緒に睦じく歩いたり遊んだりしてゐる中に、いつかその女が友達のものになつてゐるのを知らずにゐたんだね……。その時は隨分痛かつたよ。初めは自分のものだつたんだからね。悲觀して山の中に入つて半年ほどゐても、その傷痍は治らなかつたよ……。それからもう一つ、これは餘程あとのことだがね、かなり眞劍になつて世話をしてやつた女があつたんだ。さうだよ、素人ぢなやいんだよ。ところが、好い加減絞られたところで、うまく寢がへりを打たれて

了つたんだね。その時もかなりに辛かつた。しかし、そんな話をいくらしたつて際限がない』
『好いから話して聞かせて下さい。その女、今何うしてるの？』
『矢張、何處かで褄を取つてゐるつていふ話だよ。でも……その時分からだね。段々色戀のことが少しづゝわかつて來たやうな氣のしたのは。惚れるといふところから、本當のことがわかつて來たんだね。人間は一度やつたことを二度やる時には、前よりはいくらか怜悧になつて來てゐるからね』
『それはさうね』
『お前にもあるだらう？』
『私なんか、何にもないわ』
『ないことはないぢやないか。兵隊さんのこともあるし、それから二階に來た男のことだつて』
『女なんて駄目ですよ。捨てられたつて、男のやうに眞劍になることは出來ないんですもの。いつだつて泣寢入ですもの』
『でも少し話してお聞かせよ』
『何にもありやしないわ。本當に女は詰らないもんですよ。向ふにゐる時には、私は働きに生れて來たのかしらと思ふ位でしたもの。でも、小間物屋にゐれば好かつたとは思ひませんね。餘程イヤだつたんですね』
いろ〳〵身の上が思ひ廻されるといふ風で、じつと考へ込んでゐたが、『私なんか、何うなつて了ふかわからないわねえ』

『その中好い亭主をさがすんだね』
『私なんか亭主が持てるでせうか』
『それは持てるさ。その中一つ好いのをさがしてやらうか』
『澤山』
かう言つてさびしさうな顔をして、『貴方は矢張情がないわね』
『情がないんぢやないよ。わかい時の情が枯れちやつたんだよ。これでも、お前が他の男でも拵へて、此方のことを構はないやうになると、熱くなつて行くんだよ』
『それは情ぢやないわ。……矢張、歌ちやんかあるからだわねえ』
『そんなことはないよ。あれなんかには、男の心持はわかりやしないよ。桃子のやうな飛離れた幕は何うせ打てない女だからね。矢張勘定連だよ。一生あんなにして、眞劍に腹も立てず、眞劍に人も思はずに、ぐずぐずに世の中を送つて行つて了ふんだね。男は唯、金さへ卷上げれば好いもの、女は體を貸しさへすれば好いものとばかり思つてゐるんだからな。桃子のことなんかも、馬鹿な智慧のない女とばかり映つて見えるんだね。面白い世間話の一つ位にしか考へられないんだね』
『あの人はしかし怜悧ですよ。他の土地から來て、まだ二三年にしかならないのに、あんな姐さんになつたんですかゝね。女將がよく言つてたわ。歌ちやんが來た時分には、それはよく捗いだもんだつて。あんなわかりの早い妓はめづらしかつたつて言つてゐたわ。でも、いくら怜悧てもあの役者だけは忘れられないんで

せう』

富田は默つて笑つてゐた。歌子の話になると、お粂は不思議にもつよい敵意をむき出しに見せて來た。富田は話をやめて裏の欄干の處に行つた。お粂は傍に寄つて來て、

『私、こんなことを此頃よく考へるのよ。今から五六年經つたら私は何うなつてゐるだらうッて。夜ひとりで寢られないでゐる時などには、ことにさうよ。私は身寄と言ふものがないから一層さう思ふのかも知れないわねえ。本當に私、一人ぼつちですものね。伯父や祖母はそれでもまア心配して呉れるけれど、親がゐないッて言ふものは悲しいものですよ。本當に何うなつて了ふでせう。その時分になつても貴方は力になつて呉れるかしら？　え？　力になつて下さる？　私と別れて了つてからも』

『それはなつてやるサ』

三十七

貸本屋の女の兒を借りて、頬摺りして一緒に寢るやうな日が幾夜か續いた。富田は來たり來なかつたりした。お粂に取つては、容易に眞劍になれない男の心が何だか頼りにならないやうな氣がした。單に玩弄にしてゐるのではないのは、それはよく解つてゐた。かうして遊んでゐても困らないだけの手當を十分にして呉るもの難有いとは思つた。しかしそれだけではまだ滿足が出來なかつた。お粂はさびしく暮した。

お粂は將來のことなどを多く考へるやうになつてゐた。かういふ生活が到底長く續くものでないといふことも考へた。お粂は桃子やお梅やお秀のことなどを思つた。

『お前さん、そんなことを言ふのは贅澤ですよ。好い旦那さんぢやないか』富田に度々物を貰つたりする下の上さんは、お粂のさびしがつてゐるを見ると、いつもかう言つて慰めた。

ある日、師匠の許でお粂は笑ひながら言つた。『私、藝者にでもならうかしら。もう少しお稽古したら……』

『お前さんなんか、いくらでもならうと思へばなれるともさ。容色はあるし、藝だつて、お前さんより出來ない人はいくらでもあるんだから……。妹の家に此間目見得に來た妓なんか、それはペンともシャンとも言へないやうな妓だよ。それで、今までよし町にゐたんだとさ。藝なんかなくつたつて、いくらでも藝者で

候ッて言つてゐられる時世だからね』師匠はかう言つて、自分が此土地で賣つてゐた若い時分の話を自慢さうにして、『それは忙しかつたもんだよ。一日に四座數や五座數するのは當り前で、忙しい時には家に歸つてゐる隙もなかつた位だつたからね。……その爲め今の妹なんかも成長くなれたんだよ。それにその時分には好い旦那もあつて世話をしてやらうといふ方もあつたんだけれど、若い時分には意氣な藝人か何かゞ好きなもんで、矢張、あの桃子さんのやうなもんだァね。その爲めに、好い目も出ず終ひになつて了つたのさ……。それでも好いた男と一緒になつたにはなつたんだけれども、なつてからは碌なことはなかつたよ』

『矢張苦勞をして來たんですね』

『その代り面白いこともあつたよ。三十五六位までは、イヤならいつでも別れてやる。未だ相手にして呉れるものはいくらもあるからつていふ腹でゐたからね、お前さん。でも、四十二三になつてからは、流石にもう駄目だと思つたね』

こんな話をして師匠は笑つた。しかし、内情に詳しいお粂は、進んで藝者にならうとも思はなかつた。不見轉の生活は慘めなものであつた。お粂は夜遲く白粉を白く塗つて箱も持たずにやつて來る女を頭に描いた。

三十八

『貴女は幸福よ』かういふ言葉をお粂は度々貸本屋の細君に言つた。三人一緒に話してゐる時にも、お粂は絶えずその亭主の濃い髪や色艶の好い口唇を見てゐた。長烟管に煙草をつめる白い手首なども眼に附いた。

靜かな口の利方をする人で、『お才や、お才や』といつもやさしく細君を呼んだ。女の兒も何方かと言へば父さん子で『父さんと母さんと何方が好き？』などゝ訊くと、始めは默つてゐても、『父さんの方でせう』かう言はれると、笑つて小さく點頭いて見せた。夜など行くと、店の處で、亭主はあぐらをかいて女の兒を抱いてゐた。

『大目ですよ。家のなんか、働きがないから』こんなことを言ふ細君の口裏からは、絶えず生計の苦しい愚痴が滴されてゐた。しかしさういふやさしい男となら、不足勝な世帶を切り廻して行くのも樂しみだらうとお粂は思つた。

何うかすると、細君の用足しに出たあとへ行つて、女の兒を中に置いて、二人で長い間世間話をすることなどもないではなかつた。夕方にはお粂はいつも湯に行つて、綺麗にお扮裝をして、セルの著物に黑繻子の帶などをしめてゐた。店頭に坐つて話をしてゐると、土手の上を通る人達は何處の女だらうといふやうに、

めづらしさうにして此方を見て行つた。

十月の中頃になつてから、雨が續いて降つた。時には一日外に出られないやうな吹降の日もあつた。河の水は夥しく增して、黃く濁つた色が鼠色の空氣の中に氣味わるく漲つて見えた。橋杭に當る水は凄じく渦を卷いた。

三四年前の洪水の話などがもうあたりの人達の口に上るやうになつてゐた。『あの時はひどう御座んしたよ。何しろ土手から此方ですからね、すぐ水がかぶつてしまふんですからね。油斷はしては居られませんよ』などと下の上さんは言つた。

貸本屋の亭主は『なあに、貴女の家は二階があるから大丈夫ですよ。あの時だつて、二階までは來はしなかつたんですから……。え、好う御座んすとも、その時は行つて上げますとも』かう言つてその時の話などをした。

溝がひらいて、塵埃が汚なく流れ出してゐる路を、高い足駄を穿いて、泥濘を拾ひながら歩いて行く人達の姿はお粂の二階からよく見えた。大抵はぴつしやり閉つてゐる二階の白い障子に雨が終日斜に降かゝつた。

『お上さんよく降るわねえ』

こんなことを言ひながら、紺蛇の目の傘を傾けて、お粂は土手の方へ買物に行つた。

色々な買物をすませて、土手を下りやうとすると、丁度向ふから幌をかけた車が一臺やつて來た。摩れ違ひながら、ちよつと覗き込んだお粂は

『あ、貴方？』

と思はず聲を立てた。

それは久しくやつて來ない富田であつた。『路がわるいのよ。車が通るかしら？』かうお粂は言つたが、『何あに大丈夫だらう』といふ聲が中でして、車は靜かに土手から向ふへと下りて行つた。

深い泥濘の中を縫ふやうにして辿つて行く車の影は、夕暮の薄暗い空氣の中にやゝ暫く見えてゐたが、お粂はそれを前にして急いで歩いた。雨はまた盛に降り出して來てゐた。

辛うじて家に辿り著いた時には、富田はもう二階に上つて、明るい電燈の下に莞爾した顏を見せてゐた。

『えらい路だね、あんなぢやないと思つた』かう富田は言つて、『今時分何處へ行つたんだえ？』

『ちよつと買物に……』

『すつかり濡れたぢやないか』

『だつて、ひどい降りなんですもの』お粂はかう言つてちよつと笑つて見せたが、著物を著替へながら、

『何うしたんですの？此頃は？少しも來て下さらないのね。……』

『少し忙しかつたもんだから』

『土地ぢや、此間から水が出る水が出るといふ評判ばかりよ。今でもあの通り、溝なんかがすつかり開いて了つてゐるんだから、本當にその時は何うしやうかと思つて、心細いつたらないのよ』

『大丈夫だよ』

『でもわからないわ、出れば一日の中に水をかぶつて了ふんだつて言ふから』

『もう天氣になるよ』

『なら好いけど…』かう言つて、長火鉢の向ふに坐つて、鐵瓶を下して、火箸で火をあらけて見て、『すつかり消えちやつた』

お粂も嬉しさうに莞爾してゐた。一人でゐる時には、女心のさびしさに、つひいろ〳〵なことを思ふけれど、かうして男に向つてゐると、さういふことは何も彼も忘れて了つてゐるのであつた。歌子の話もこの夜は二人の口に上らなかつた。

お粂は下の上さんに頼んで、鰻などを取つて貰つた。お粂は貸本屋の亭主の話などをして、『だから、其時は來て貰ふやうに頼んで置くのよ』

『大丈夫だよ、僕だつて來るよ』

『でも本當にひとりでゐると心細いわ。力になつて呉れる人は誰もゐないんですもの』

樂しげに笑ふ聲は久し振で二階から洩れて聞えた。つゞいて三味線の音などもした。二階の一間はその夜は遲くまで明るく雨の降り頻る中に見えてゐた。

三十九

その後は雨が猶つゞいて降つた。水が出るといふほどではないが、土手の此方は大方泥濘の深い路になつて了つた。川には黄い佗しい色をした水が漲りわたつて見えた。

何うかすると、蔽ひかさなつた雲の中から日影が一時ぱつとさすことなどもあつた。お粂はさびしく二階で三味線などを彈いた。

歌子に對する噂をお粂は時々耳にした。富田は矢張其處に行くらしかつた。男の心といふことがお粂にはわかり難ねた。頼りになるやうで頼りにならないやうな心持がしてゐた。頼りにして好いのか、頼りにしても仕方がないのか、それもちよつとお粂にはわからなかつた。『そんなもんですよ、一緒になれば皆な思つたやうにならないものですよ』かう貸本屋の細君は言つた。

もつと落附いた心持でゐたいとは思ふが、今の境遇では、何うしてもじつとしてはゐられなかつた。何時かういふ生活が破れて、新しい困難が其の前に迫つて來るか知れなかつた。窓に凭りかゝつて、お粂は降り頻る雨を見てゐた。

工場の汽笛の音が川に鳴りひゞいて聞えた。大きな鼠色をした幌が樹と樹との間から見えた。女工と男工と

が夜おそく戯談を言ひながら窓の下を通つて行く氣勢がした。

『もう大丈夫ですよ。水が出るやうなことはありやしませんよ』かう貸本屋の亭主が言つた時には、雨が晴れて、土手下の黄んだ溝に日がわびしくさしてゐた、番傘などが干してあつた。

『でもかうして一人してゐると、さびしう御座んすよ。矢張忙しけりや、思ひ出す暇もないやうなもんですからね』こんなことをお粂は言つた。

お粂は早くから戸を閉めて、毎夜土手の方に遊びに出かけた。師匠の家で花牌を引いてゐることもあれば貸本屋の家で夜遅くまで話してゐることもあつた。雨のやんだ後には、月が明るく河水を照した。

大正六年四月十二日印刷
大正六年四月十五日發行
〔つれびき〕
定價金壹圓也

著者　田山花袋
發行者　東京市本郷區駒込林町二百卅七番地　築瀬富次郎
印刷者　東京市神田區錦町一丁目三番地　大澤京之助
印刷所　東京市神田區錦町一丁目三番地　三陽堂印刷部

發行所　東京市本郷區駒込林町二百三十七番地　三陽堂書店
振替口座東京二五〇一〇番

不許複製
著作者三陽堂誠印証

■ 三陽堂發行圖書 ■

三 竹久夢二著
版 繪入歌集 暮笛
表裝繻子及木版刷金文字入
天金裝幀燦爛高雅頗優美
四六判木版二十一度刷帙入
定價金壹圓貳拾錢
内地送費金 八錢

著者夢二氏は畫家にして又歌人である、氏が其胸底に刻された古今百首の名歌を選び盡家たる氏の彩筆と對照し二面の夢二式天才の發揮を一個に蒐めたものが此「暮笛」である短歌素より絶唱、繪は更に獨特の筆管、並び俟つて恍惚忘我の境に心を遊ばせる入神の城は昔の歌麿、豊國の再現を思はずには居られない。帙は氏の名畫を木版廿一度刷精巧無比眞に机上の異彩である。滿天下の青年男女よこの芳烈な香に醉はれよ。

五 泉鏡花著
版 菖蒲貝
全一冊絹表裝木版數度刷
裝幀高雅頗優美箱入
菊半截五百八十八餘頁
定價金壹圓貳拾錢
内地送費金 八錢

内 □春畫 □歌行燈 □玄武朱雀
□春畫後刻 □夜行巡査 □沼夫人
容 □袖屏風 □處方秘箋 □三味線堀

本書は著者の作中より代表的または出世作を選びこゝに本書を刊す。蓋に是れ我が文藝の精華にて不朽の名作のみ也。苟くも文藝に志す人は必ずこれを備へざる可からず。著者の精粹は即ち此の一卷に集中せり。

■ 三陽堂發行圖書 ■

八 鈴木三重吉著
版 珊瑚樹
全六號活字一頁七百餘字
總キャラコ製木版手刷十度刷
菊半截四百十余頁
定價金九拾五錢
内地送費金 八錢

内 □櫛の瓦 □一枚の瓦 □桐の雨 □小猫
容 □女赤い鳥 □お三津さん 穴 □黑血

今迄著はした十數冊の小說集の中から著者自身に最も氣に入つた作物ばかりを選り集めて縮刷したものです。讀者は本書一冊を讀みて赤門派隨一の作家三重吉氏の精粹を會得するを得べし

五 田村俊子著
版 あきらめ
全六號活字全一冊縮刷
裝幀高雅なる美本箱入
菊半截四百余頁
定價金九拾五錢
内地送費金 八錢

内 □あきらめ □木伊乃の口紅
容 □生血 □憂鬱の匂
□魔女作者 □炮烙の刑

「あきらめ」は、大阪朝日新聞で金二千圓の懸賞小說募集に第一等に當選した長篇の傑作であつて、他は其れから後の最も苦心した而して評判のあつたもので著者自身が撰擇した即ち會心の作のみである。

■ 三陽堂發行圖書 ■

長田幹彦著

六版

舞姫

絹布表紙金文字入裝幀高雅
舞姫姿畫木版數度手刷優美

函入全六號活字縮刷
定價金九十五錢
内地送費金八錢

内容
□零落□扇昇活□送り火
□お飾□雛勇□鳥邊山
□尼僧□尼僧光珠□涛

京の舞姫を描いては妖艶無比、漂泊の藝術家を拉し來りては嘆絶類なし或は雪深き北の國に思を密め、或は紅燈のもとに美妓と語る、實に著者は我が文壇唯一の抒情佳人なり

正宗白鳥著

四版

まぼろし

全一冊全六號縮刷
裝幀頗高雅優美箱入
菊半截四百頁
定價金九拾五錢
内地送費金八錢

内容
□まぼろし□微光
□毒□二家族
□泥人形□挿話

深刻なる藝術は著者の創作に求むべし、本書收むる處の作品は著者の自ら許すもの悉く讀書界を風靡せる傑作にして、何人も一讀すべき著者獨特の傑作集なり。

■ 三陽堂發行圖書 ■

上司小劍著

三版

お光壯吉

全一冊木綿表紙木版數度手刷
裝幀高雅頗る美本箱入
菊半截約四百頁
定價金九拾五錢
内地送費金八錢

内容
□お光壯吉
□太政官
□木像

最近文壇を風靡せる著者が最も得意とする洒脫にして深刻なる上方藝術に對しては何人の模倣をも寄さゞるは言を俟たず。眞に著者の藝術を探索して上方藝術に到着し著者が今日に及ぶまでの凡ての傾向を忌憚なく表白せるは本書である。欲むるところ「お光壯吉」の圓熟せる筆致を以てせる情調極りなき一大雄篇より最近の作「太政官」に及び「木像」の最大長篇を以て終る著者の全藝術である。

小山内薰著

四版

一里塚

全一冊紺表紙木版數度手刷
金文字入裝幀頗る優美箱入
菊半截四百十余頁
定價金九拾五錢
内地送費金八錢

内容
□病友□十三年□後悔
□手□眞空□捕縛
□粘土□乞食□大川端

著者が自ら會心の作として撰集せられたるものて實に氏が代表作であると同時に殆んどその全集と見ることが出來眞にこれ時代文學の精華として永く後代に傳ふべき傑作集なり

ドストイエフスキイ原著
生田長江
田春月共譯
五版

原稿紙千五百餘枚の大作全六號
六百餘頁に縮刷一頁一千餘字詰

全譯
罪と罰

背皮製金文字入四六判
圖入裝幀頗る優美
定價金壹圓四拾錢
内地送費金十二錢

フリードリッヒ、ニイチエその『偶像の微光』に於て曰く「ドストエフスキイ」は我が生涯の最美なる幸福の事件に屬す」と。此偉大なるドストエフスキーの代表傑作「罪と罰」は唯徒に名のみ吾人の耳に熱して未だ其の實を見る事能はざりしは吾人の遺憾とせし處。然るに今や兩生田先生の苦心の下に全譯成り空前の廉價を以て近く市場に現れんとす敢て讀書界の慶事たるを信ぜんとす。

ロンブロオゾオ原著
辻潤先生譯
訂正
五版
訂正
全譯
天才論

總布製裝幀極優美
全六號四百餘頁縮刷
四六判天金箱入美本
定價金壹圓貳拾錢
送費金八錢

我が文壇の泰斗夏目漱石氏讃して曰く天才の風貌を窺んと欲せば本書を必讀せよと、又詩壇の驍將蒲原有明氏は常に本書を推稱して竭まず、近くは厨川文學士は其著近代文學十講中に至る處本書を引例せる、以つて本書が如何に天才研究上缺くべからざる大權威ある良書なるを證するに足るべし。漱石氏をして必讀書と叫ばしめしも宜なる哉發行早々增版又增版し洛陽の紙價を高からしめたる本書は今や五版を增發するに當り譯者は更に嚴密訂正し殆ど新面目を呈して遺憾なからしめき。天才研究家、又近代文藝を根底より理解せんと欲する人々は云ふまでもなくあらゆる生活者は本書を机上の寶典として愛する事を怠る勿れ。

アルツイバシエヴ作
武林無想庵譯
五版
原稿紙九百數十枚の大作
全六號四百二十頁に縮刷

全譯
サンニン

四六判總布製美本
定價金壹圓也
内地送費八錢

アルツイバシエヴの代表的傑作として衆評の一致してゐる本書は彼が二十四才の作で（一九〇〇年の出版）過渡期の思想小説の銘を打たれて公にされた。讀書界の歡迎は露都の紙價を一時に高からしめた慨があつて、實に空前の賣行だと云はれてゐる。而して主人公サニンの思想は忽ちにして露國青年男女の思想界を席捲しサニン主義を奉ずる男女の祕密結社が至る處に出現した。其社會的影響の甚大なるに驚いた露國官憲は遂に本書の發賣を禁止し、雜誌現代の主筆クラニフエリド氏は本書を發行したる廉により八ケ月の刑に處せられた。然しそれは露西亞の國情が然らしめたので公平な眼で見て是は立派な高級藝術品である。

シエンキユキツチ原著
松本雲舟先生譯
五版
改譯
縮刷
何處へ行く

定價金壹圓拾錢
全一冊ポケット形洋裝
總クロース天金箱入
小包郵稅金八錢

波蘭文豪の世界的名著「クオヴアデス」の譯者として松本氏の名聲は世既に定評がある。本書は氏が九ケ年以前に一度出されたるものを訂正增補し、縮刷にしたものであるが、面目更に一段の光彩を添へて居る。リツアの純潔とペニチウスの戀を中心とし、靈肉一如にして、文武兼備の希臘精神の末路を描いたもので、靈と肉懷疑と信仰利巳と利他の決鬪史である、加之氏の、靈筆よくこれを活譯し、文章平明にして暢達、靈肉一致を稱ふる人々の一讀に價するものである、美裝縮刷にして極めて心地よき手輕な本となつた（第三帝國）

■ 三陽堂發行圖書 ■

大町桂月先生編
リットン卿原作

五版

ポンペイ最後の日

四六版總布製極美本
拾數枚繪入約四百頁

定價金八拾錢
送費八錢

ローマの都市ポンペイに亡國の嘆を抱いてさすらふキリシヤの青年が才色雙絕の美女と燃ゆるが如き戀に落ち端なくも半圓劇場に獅子と鬪ふの運命に會ふ。其日を即ちポンペイ市の最後の日としてヴエスヴイアス山は爆發の煙を擧げ總て人生の空しき營みを熔岩と灰の下に埋めて終ふ。編中の人物星をトひ覽を招ずる覽法使あり流離の盲目美人あり……

大町桂月先生編
スコット原作

四版

アイヴアンホー

四六版クロース製極美本
拾數枚繪入約三百五十頁

定價金八拾錢
送費八錢

華麗錦繡の如き文章と結構叙事の完璧とはスコット一代の傑作にして世界文壇の花である主人公アイヴアンホーは勇武絕倫の騎士にして之に艶麗花を欺く美人を配して描ける作者の靈妙なる筆致は濃艶優雅の趣を深くし夢の如き中世期の生活を餘蘊なく描破してゐる。編中山賊强盜の群あり戀に破れて何處ともなく去り行く哀れなる猶太少女あり……

■ 三陽堂發行圖書 ■

シエンキウイッチ作
大町桂月先生編

四版

クオ・ヴヂス

四六判總布製極美本
十數枚繪入約三百五十頁

定價金八拾錢
送費八錢

歷史小說として最も偉大なるもの、背景の雄大なる人物の複雜なる、錯綜して目も彩なる繪卷物となる、ネロの暴虐は人をして戰慄せしめ基教徒の血汐はローマを淨化して新天地を開かしむ。

大町桂月先生監輯

六版

修養日訓

四六判三百八十餘頁
總布製箱入美本

定價金壹圓貳拾錢
小包郵稅金十二錢

桂月先生の序に曰く（前略）謹んで世の修養に志ある人々に告ぐ。一時に修養上の知識を貪らむとする勿れ。日に少しづつ自得して實行せよ。更に此書を繙く人々に告ぐ。日々其日の條のみを讀め而も熟讀せよ。解らぬなら、解る迄熟考せよ昨日以前讀み終りたる所を回顧するも好し。決して翌日以後の條を見るべからず。如何に多忙なりとも、其日の條を讀まざるべからず。かくて一日又一日。一月又一月、一年の後に至りて一年前と比較して見よ。必ずや諸君は吳下の舊阿蒙にあらざらむ。

三陽堂發行圖書

綱島梁川譯
安倍能成譯補

全一冊洋裝菊判
總クロース箱入

三版

耶蘇傳

ルナン氏

定價金壹圓五拾錢
小包郵税金十二錢

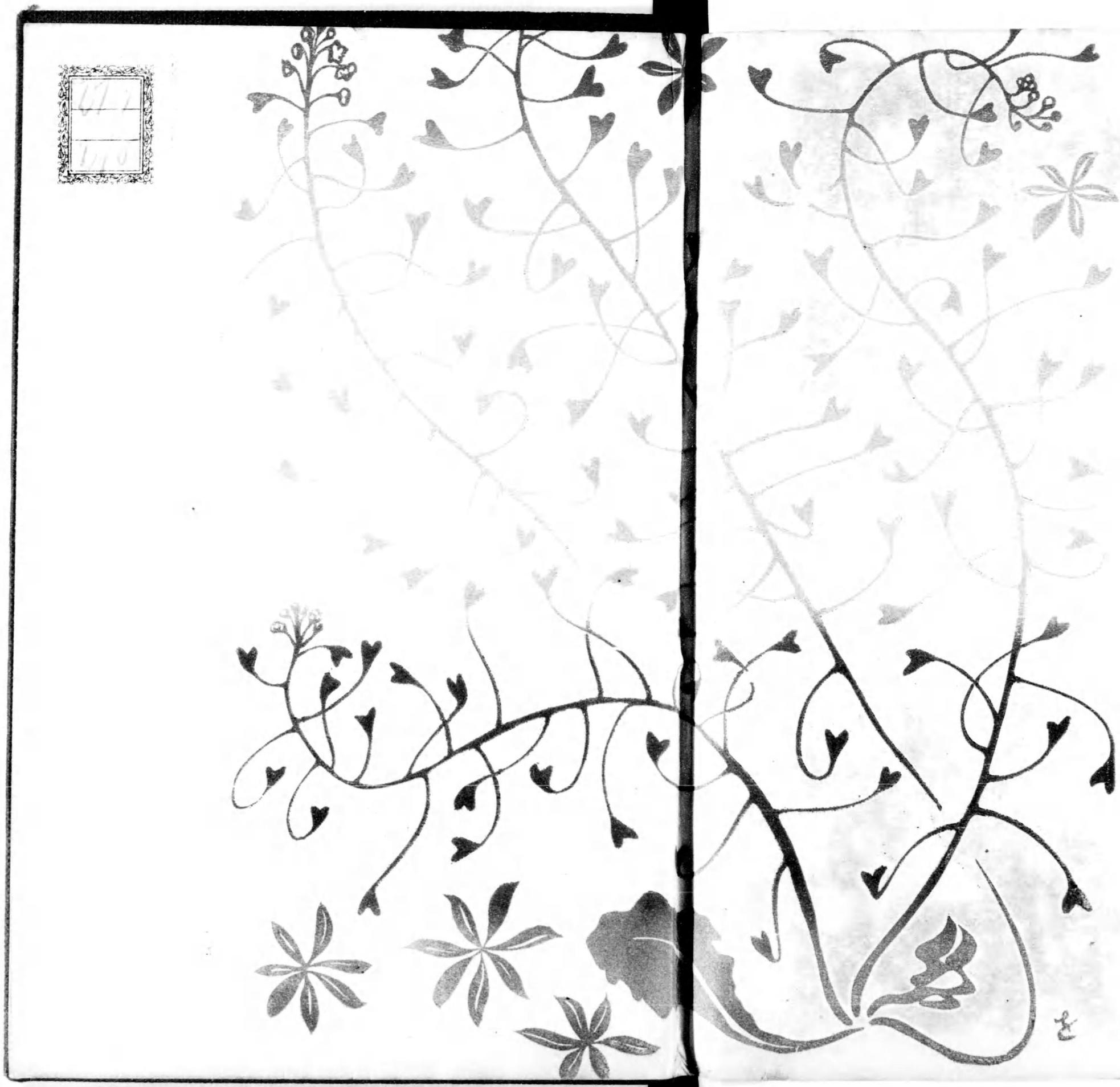
此書救主生涯其懷しき神の國の思想天父の觀念を叙べ、奇跡を論ず、更に他の宗教との關係を明にし、其國家觀、社會主義觀、又此間に隱見す自由詩究の精神の一貫して批評の鋭刃觸れざる所なく、之が爲め一時歐米基督教界を震動して顏色を失はしめたりと雖世界史上に於ける耶蘇の位置は變ずに依て確められたりと言ふべき也、本書は故梁川氏念心愛讀の書にし、ルナン氏明快の想と、梁川瑰麗の文に接せんとする士は須らく本書を繙け。

高濱虛子著
四版

虛子句集

菊半裁南京特製函入
定價金六十五錢
送費內地金八錢

俳壇の巨人虛子先生の作句は既に數萬を數ふ。本書は之等多數の中から嚴密精選二千餘句を拔粹し之を季題によつて分類配列したもので、先生の句集として全く最初のものである。格調の高雅にして平明、混沌たる俳壇に嶄然として動かざる權威を有し而も初學者の最も欲き易き句風たるは世間の定評あり。



終